

(2006)「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」『言語情報学研究報告 13 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」:229-243. 15 頁. 2006 年 11 月.

談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義¹

宇佐美 まゆみ

(東京外国語大学大学院教授, 事業推進担当者)

1. はじめに

東京外国語大学 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の主目的に, 言語学・応用言語学・情報工学という 3 つの分野の協働による「言語情報学」の構築ということが掲げられている。言語学, 応用言語学, 情報工学という各分野の範囲や名称には様々な捉え方があるが, これらの 3 分野のうち, 本稿では, 学際的研究分野であり「応用言語学」とも関係が深い「談話研究」を取り上げる。まず, 談話研究において, 「ローカル分析」と「グローバル分析」の「双方の分析」を行うことの意義を, 自然会話コーパスのデータの分析例を提示しながら論じる。その上で, ローカル・グローバル双方の観点を含む談話研究の成果が, 言語学・応用言語学・情報工学それぞれに寄与できる点をまとめ, さらに, それが「言語情報学」という新たな分野の創生にいかに関与するかについて考察する。

一般的に, 「談話分析」とは, 2, 3 の発話のやりとりの言語学的分析を指すことが多い。このような分析は, 本稿で扱う「ローカルな分析」に相当する。しかし, 本稿では, 談話研究においては, ローカルな観点からの分析だけではなく, ローカル・グローバル双方の観点から総合的に分析することが重要であるということを論じる。本稿では, それを「言語社会心理学的アプローチ」と呼ぶ(宇佐美, 1999b)。「談話研究」という語についても, いわゆる「談話分析」よりも広い観点から行われる談話の研究全般を指すという意味で用いる。

まず, 談話研究における「ローカル分析」と「グローバル分析」がどのようなことを指すかをまとめる。談話研究における「ローカル分析」とは, 文レベルや発話行為レベルの分析, つまり, 当該会話内の文脈などの要因を考慮に入れながらも, あくまで会話というやりとりの中における個々の発話の機能を分析することを指す。例えば, 実際の会話の中では, 同じ会話における同じ対話相手に対して, それまでは敬体(です・ます体)を使って話していたところを, 「そう思う」や「すごい」などというように, 一時的に, 常体にシフトさせるという現象が見られることがある。このような敬体から常体へのスピーチレベ

¹ 本稿は, 2005 年 10 月 5 日に東京外国語大学で開催された, 言語情報学国際会議でのパネル「言語情報学とは何か—言語学・応用言語学・情報工学の言語情報学への寄与—」における発表内容をまとめたものである。

ル・シフトが生じた発話を、その前後の文脈などを考慮し、その機能を「相手に共感したり、相手との心的距離を縮めたいときに生じる」と解釈するような場合である。このようなローカルな観点からの分析は、従来の言語学において洗練を重ねられてきたアプローチであると言える。

それに対して、「グローバル分析」とは、より長い談話レベルの分析、例えば、発話のやりとりに影響する当該会話外の要因（話者の年齢・社会的地位・性等）を考慮に入れ、談話全体の特徴をある程度量的に捉える分析や、さらには特定のスピーチレベルの使用頻度の平均といった談話の「基本状態」（宇佐美，2002；2003b）を考慮に入れた分析を指す。次節以降では、このローカル分析・グローバル分析の意義について、実際の談話をを用いたより具体的な例を示しながら論じていく。

2. 「ローカル分析」と「グローバル分析」の例とその意義

ここでは、談話研究には「ローカル分析」と「グローバル分析」の双方が不可欠であるということ为例証する。まず、友人同士で、一方が飲みに行こうと誘う「誘い談話」の例、次に、初対面の大学生同士の雑談における「依頼行動」の例、最後に、日本語のスピーチレベル・シフトについての研究例を取り上げる。

2.1. 「誘い談話」の分析

鄭（2006，本報告集掲載）では、何かを誘うという行為を含む談話を「誘い談話」と名付け、誘い手と被誘い手の相互作用の分析をしている。ここでは、当データの一部を取り上げ、話者の発話の真の意図を理解するには、ローカルな観点からの分析とグローバルな観点からの分析の双方が必須であることを示す。

2.1.1 「誘い談話」の概要

ローカル分析、グローバル分析について論じる前に、ここで扱う「誘い談話」の概要を説明する。データは女子大学生友人同士による会話である。会話収録の際、誘う側の佐藤（仮名）は、自由な会話の中で、佐藤自身が負担に感じないことを、相手の鈴木（仮名）に誘いかけるよう指示されている。

この会話における話題の展開は、次の通りである。

- 1) 飲み会への誘い
- 2) 飲みに行く場所の相談
- 3) 他に誰を誘うか
- 4) 共通の友人が酔ったときの様子について
- 5) 自分たちが酔ったときの様子について
- 6) 一般的に飲み会をするということについて
- 7) 再度の飲み会への誘い

2.1.2 「誘い談話」の分析

会話の導入部では、話者たちに共通の友人のことを話している。その後話題が移り、「塾のバイトが大変だから気晴らしに飲みに行こう」と佐藤が誘うところから、「誘い談話」が始まる。

例1は、佐藤が鈴木を飲みに誘った部分の談話である。

例1 飲み会への誘いの発話が発せられる場面²

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
118	114	*	佐藤	飲みに行かなきゃやっつらんないよ<2人笑い>。
119	115	*	佐藤	えっ本当だから行こう飲みに。
120	116	*	鈴木	私でもね、(んー)下戸なんだよね、(あ)母親が。
121	117	*	佐藤	母親が?。
122	118	*	鈴木	うん、アルコールアレルギー=。
123	119	*	佐藤	=あー、マジで?。
124	120	*	鈴木	あり得ない。
125	121-1	/	佐藤	じゃじゃじゃあー=。
126	122	*	鈴木	=あつ、でも、こう、飲みのお酒気は好き。
127	123	*	佐藤	うん。
128	124	*	鈴木	うん。
129	121-2	/	佐藤	じゃ、ご飯美味しい所へ行って><1>。
130	125	*	鈴木	<行って><1>。
131	121-3	*	佐藤	ちょっと飲めるよ(うーうんうん)みたいな所にしよう。
132	126	*	鈴木	うーうんうんうん。
133	127	*	佐藤	うん。

ライン119で最初に佐藤が飲みに行こうと誘ったときに、誘われた鈴木は、ライン120で、「母親が下戸だ」と答える。それを誘いに否定的な反応だと捉えた誘い手の佐藤は、それを聞いて別の案を出そうとしてか、ライン125で「じゃあ…」と言いかける。しかし、鈴木はそれをさえぎって、ライン126にあるように、「でも飲む雰囲気は好き」だと、飲み会に行くこと自体には積極的だと解釈できる発話を行う。それから、話題は、「それではご飯がおいしくてちょっと飲めるようなところへ行こう」という展開になり、それに対して

² 会話の文字化は、宇佐美（2003a；2006）の「改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）」に従っている。文字化資料上で用いられている各種記号の意味については、付録の記号凡例を参照されたい。

ライン 132 において鈴木が「うーうんうん」と頷き、ライン 133 において、佐藤がそれに呼応して「うん」と念を押す形になる。ここでいったん誘いが成立したと解釈することができる。

この後の会話では、二人はどこに飲みに行くかという相談をしており、二人とも飲み会に行くつもりでいることがわかる。さらに、他に誰を誘うか、共通の友人が酔うとどうなるかという話を経て、今度は自分たちが酔うとどうなるかというように、話題が展開していく。

ところが、さらにその後、例 2 のようなやりとりが交わされる。

例 2 飲み会に行くことに消極的な態度を示す場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
175	168	*	鈴木	えっ、でも、むかえ酒って効くの？
176	169	*	佐藤	/沈黙 3 秒/どう、どうなんだろうね。
177	170	*	鈴木	でも、なんか二日酔いとか絶対、なんないから、なんかお酒が途中でますぐなって、(ああああ)そのまま寝ちゃうから。
178	171	*	佐藤	いいね。
179	172	*	鈴木	うーん、どうなんだろうね。
180	173	*	鈴木	っていうか、なんか、飲み会に行くって本当に損した気分になる。
181	174	*	佐藤	あああ。
182	175	*	鈴木	“なに、3,500 円、だって私はこんなちよっつしか飲まないのに”とか。

ライン 177 において、誘われた鈴木が、「自分は酔うと寝てしまう」と話す。それに対して佐藤が、ライン 178 において「(二日酔いにならないのは)いいね」と言うが、この発話を契機として、鈴木は、ライン 180 において「飲み会にいくと損をした気分になる」という、飲み会に行くことに消極的だと解釈できる発話を再度行うことになる。これを受けて、話題は、先に成立したはずの「飲みに行く」話に戻る。次の例 3 の通りである。

例 3 再度誘い内容に話題が戻る場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
183	176-1	/	佐藤	なんか、飲みほー[飲み放題]とかにしなくてさ、だからさ、少人数で行けばさ、
184	177	*	鈴木	うううん。

185	176-2	*	佐藤	なんないじゃん(笑)。
186	178	*	鈴木	くそうそう(笑)そうね。
187	179	*	佐藤	だからさ、アー‘A’の子さ、結構誘ってじゃ行こうよ。[アー‘A’は、学科内のクラス名]
188	180	*	鈴木	うん、そうだねえ。
189	181	*	佐藤	うん。
190	182	*	鈴木	うん、交友させてくださいませませ…。
191	183	*	佐藤	ませませませ(2 人笑い)。

誘う側の佐藤は、ライン 183, 185 で「少人数で飲み放題ではないところに行けば、飲めない人も損にはならない」というように、鈴木が損をしたような気分にならないように配慮する発話を行い、「クラスの子を誘って行こう」と、改めて誘いを行う。誘われた側の鈴木は、それに対して、ライン 188 で「うんそうだね」と言い、続いてライン 190 で「交友をさせてください」と言うことによって、改めて誘いを受諾する。この後、誘い内容に関する交渉は行われなことから、ここで最終的に誘いが成立したと解釈できる。

このように、「誘い談話」全体のやりとりをグローバルな観点から見ると、誘われる側は、誘いをいったん受諾したように見えた後でも、誘い内容を発展させるような肯定的な発話だけでなく、誘い内容に否定的なコメントをしりすることもあることがわかる。そのため、この例の場合、ライン 190 まで分析して初めて、「誘い」が成立していると捉えることができるのである。

このような展開から改めて明らかになった情報も含めて、グローバルな観点から個々の発話を考察すると、例えば、鈴木がライン 119 で「母親が下戸だ」と言ったことは、そこでは飲みに行くことに否定的な発話だと思われたが、その実際の意図は、「自分はあまり飲めないので飲み放題のようなところに行くのは気が進まないが、飲み会を通じた交友はしたい」ということであつたということが分かるのである。

このように、話者同士のやりとりのローカルな観点からの分析のみでは、誘われる側の真の発話の意図を解釈することは難しい。誘いが成立したか否かという「誘い談話」の結末がどうであつたかということまでを考慮に入れたグローバルな観点からの分析も必要なのである。

このように、会話全体の流れと誘い談話の最終的結果を踏まえた上で、個々の場面における発話のやりとりをローカルな観点から分析するというのが、ローカルな観点・グローバルな観点双方を考慮に入れた談話研究である。

2.2 「初対面雑談」の分析

次に、初対面の雑談において依頼行為がなされた例を取り上げる。データは、2005 年 6 月に COE から公開された「BTS による多言語話し言葉コーパス-日本語会話 1 (日本人母

「語話者同士の会話」(宇佐美監修, 2005)に収められている会話で、20代女性同士の初対面の雑談である。雑談の冒頭で突然、田中(仮名)から「英語の指導してほしい」という依頼が行われ、その後会話が終了するまで、同じ内容の依頼についての交渉や確認が何度もくりかえされる。

例8 会話の冒頭で依頼がなされる場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
1	1	*	田中	ロシア語科ですか?。[渡辺がロシア文学の本を持っているのを見て]
2	2	*	渡辺	いえ、英語科です。
3	3	*	田中	あ、英語科ですか…。
4	4	*	田中	え、何年生です…?。
5	5	*	渡辺	と、今、4年です。
6	6	*	田中	あ、そうですか。<。>
7	7	*	渡辺	<はい>。>
8	8-1	/	田中	あの、あたしも4年なんですけど、
9	9	*	渡辺	はい。
10	8-2	*	田中	英語教えてもらえないですか?<笑いながら>。
11	10	*	渡辺	<笑い>教えるほどできないです。
12	11	*	田中	いや、違う、ほんとに、あの会話でいいんですよー。
13	12	*	田中	これはほんと、切実なんですけどー<。>
14	13	*	渡辺	<あー>。>
15	14-1	/	田中	あの、就職試験、
16	15	*	渡辺	あ、<はい>。<。>
17	14-2	/	田中	<で>。>、英会話があつてー、
18	16	*	渡辺	あー。
19	14-3	*	田中	でもあたし、英会話すごい苦手なんですよー。
20	17	*	渡辺	<笑い>。
21	18-1	/	田中	だからー、もし時間があつたらなんですけど、
22	19	*	渡辺	<笑い>。
23	18-2	*	田中	でも忙しいですよー<ね>。<。>
24	20	*	渡辺	<いえ>。>いえ、あたしで良ければ<笑いながら>。
25	21	*	田中	え、ほんとですか?。

お互いまったくの初対面であるにもかかわらず、自己紹介もしないまま、相手が英語科だと聞いた田中が、ライン10でいきなり英語の指導をしてもらえないかと依頼する³。田中に依頼された渡辺は、はじめは謙遜まじりに所っているが、ライン12以降、田中がさらに食いがかり、英会話が就職に必要だということを訴えると、ライン24で渡辺は、「あたしで良ければ」と承諾する。

この後の話題は、渡辺が経験した語学研修について、高校時代の英語の授業の様子、入試のときの話へと移っていく。その後田中は、次の例9にあるように、再度先ほどの依頼を切り出す。

例9 2度目の依頼がなされる場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
173	154	*	田中	え、でも、いやちよつと話変わるけど、本気で、あの、探してるんですよ、英会話指導して(んー)、指導してくれる人。
174	155	*	渡辺	だったら、本物の外人のほうが良くないですか?。
175	156	*	田中	や、別に、だって多分、面接官日本人。
176	157	*	渡辺	うんうん。
177	158	*	田中	だから、なんか、コーヒーおごるぐらいしかできないんですけど<2人笑い>。
178	159	*	田中	ほんの15分ぐらいとか。
179	160	*	渡辺	うん。
180	161	*	田中	え、ほんとにいいですか?<。>
181	162	*	渡辺	<いいですよ>。>
182	163	*	田中	え、ほんとに見ず知らずの…。
183	164	*	渡辺	あ、はい。
184	165	*	渡辺	別に、暇なんで。
185	166	*	田中	えー、ほんとー?<2人笑い>。
186	167	*	田中	就職とかって決まったんですか?。

ライン173, 180, 182にあるように、会話の冒頭部のライン24で一旦は約束が成立したと考えられる内容について、田中は再度依頼や確認を行っている。それに対して渡辺は、先ほどは承諾したにもかかわらず、ライン174で「だったら本物の外人のほうがよくないですか?」と、依頼内容に消極的な発話をする。しかし、田中は、「面接官が日本人なので

³ 会話収録を依頼された際、話す言語が指定されなかったが、渡辺が英語の会話だと解釈し英語で話し始めたため、日本語の会話をするように指示し、再度収録しなおしたという経緯があった。その経緯を踏まえてこの会話の冒頭部のやりとりを見ると、田中は、渡辺が何も指定されない状況で日本語でなく英語を選択したことから、彼女はかなり英語に自信があるようだと予測したのだと考えられる。

日本人でもいい」という趣旨の発話をする。それに対して渡辺はライン 179 で「うん」と答えるが、田中自身も、初対面の相手に向かって突然英語の指導を依頼するのが一般的ではないことを承知しているのか、「ほんとにいいですか?」「ほんとに見ず知らずの…」と、その後二度も確認をしている。この後、例 10 のように、具体的な日時や場所などの交渉に移っていく。

例 10 依頼内容に関する日時や場所等の交渉の場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
204	185	*	田中	うーんと、え、いつが暇ですか?。
205	186	*	渡辺	いつ。[無声化]
206	187	*	渡辺	火、火曜日と、金、木金が学校来てるんですよ。
207	188	*	田中	あじゃ、その時がいいです><かかね。
208	189	*	渡辺	<うん>>、お昼食べながらでも。
209	190	*	田中	あー、ほんとですかー?<笑い>。
210	191	*	田中	あー、も、すごいうれしいですー。
211	192	*	渡辺	え、じゃ、携帯の番号教えてください><。
212	193	*	田中	<あ>>、はい、<お願いします>><。
213	194	*	渡辺	<こんなところ録って>><いいのかな。
214	195	*	田中	<笑い>>いいんじゃない…。
215	196	*	田中	/沈黙 2 秒/あ、お名前、お名前聞いてなかった、お名前。

ここで、具体的な日時の打ち合わせや連絡先の交換が行われる。そのあと、田中は、ようやく自己紹介がまだ済んでいなかったことに気づく。この後、ふたりはお互いに自己紹介をし、田中の就職試験の話、必要とされている英会話の内容やレベルなどについてへと話題を移していく。その後、先ほどの依頼内容について、例 11 の通り、さらに次のようなやりとりが交わされる。

例 11 一度成立した依頼内容について念押しがなされる場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
292	266-2	*	田中	あれだから、うん、一応 2 次の英会話の練習したいなって思ってるんだけど(うん)、なんか、うん、周りの人も忙しくて、なんかあたしに教えてくれなくて、探してるんですよ<2 人笑い>。
293	269	*	田中	え、でもほんとにいいですかー?。
294	270	*	渡辺	や、別にいいですよ。

295	271	*	渡辺	あんまり為にならないと思いますけど。
296	272	*	田中	いや、つてか、<笑い>ほんとになんか、しゃ、しゃべ、んーと、なんか、あ、相手がいるだけでいいんですよ><。
297	273	*	渡辺	<ん>>。

このように、一旦具体的な約束をしたにもかかわらず、田中はここでもまだ念を押している。

この後、お互いにこれまでの語学学習の体験談を話し合い、それが一段落した後、例 12 の通り再び日時の確認が行われる。

例 12 再度依頼内容に関する日時の確認が行われる場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
377	350	*	田中	英語で考えられるようになると、(うん)もう、大丈夫ですよー。
378	351	*	田中	そこ、に、危機感…。
379	352	*	渡辺	<笑い>。
380	353	*	田中	だから、多分、会話の練習すると、そういう(うん)訓練になるのかなーと思って。
381	354	*	田中	お願いします<笑い>。
382	355	*	渡辺	はい、じゃ、学校いる時にでも、電話ください。
383	356	*	田中	あ、はい。
384	357-1	/	田中	火曜日と。
385	358	*	渡辺	火曜日と木金です。
386	357-2	*	田中	木、金。
387	359	*	渡辺	はい。

ライン 384 以降、田中は、既に聞いた渡辺の空き時間について、もう一度確認をとっている。最後に会話時間が終了するところで、田中は、「ほんとに、あの、電話させてもらいます」と、最後の念押しをして会話をしめくくっている。例 13 の通りである。

例 13 依頼内容の念押しをしながらか話が締めくくられる場面

ライン番号	発話文番号	発話文終了	話者	発話内容
658	608	*	田中	ほんとに、あの、電話させて、/沈黙 3 秒/もらいます。
659	609	*	渡辺	はい。
660	610	*	田中	ありがとうございます。

この会話における依頼行動をまとめると、発話の意味上は、すでに例8の会話冒頭部のライン24において、依頼は受諾されていたと考えられる。しかし、話者同士が初対面であること、ろくに挨拶も交わさないまま行われた依頼の交渉であったこと、その後何回も同じ内容の依頼がなされたことを考えると、冒頭部分のライン10の依頼発話からライン24の依頼の受諾までのやりとりだけでは、実際には依頼の成立は確定していなかったと解釈できる。田中・渡辺双方が、依頼が明確には成立していないと認識しているからこそ、何度も依頼が繰り返されたのだと考えることができる。

このように、自然会話においてある目的が達成されるまでには、しばしば長く複雑な交渉のプロセスがある。ある一連の発話群のみを切り取って、そこで達成された機能や話者の意図を解釈しようとするときには、その後の展開がどうなっていたのか、話者同士の関係や会話がなされた状況はどのようなものであったか、といった「グローバルな要因」を考慮した上でないと、判断を誤ってしまう危険性もあるということが分かる。

2.3. スピーチレベル・シフトに関する分析

最後に、日本人社会人初対面同士の雑談におけるスピーチレベル・シフト⁴の研究を取り上げ、ローカルな分析とグローバルな分析双方を行った研究の例を簡単に示す。

実際の会話におけるスピーチレベルは、ひとつの会話の中で一定だということはむしろ珍しく、そのときの状況や話題などに応じて、一時的にシフトするという現象がよく見られる。35歳の社会人女性をベースにし、対目上(45歳)、対同等(35歳)、対目下(25歳)の女男との会話を分析した宇佐美の一連の研究(宇佐美, 1995; 2001b; Usami 2002等)では、常体から敬体へのシフトをアップシフト、敬体から常体へのシフトをダウンシフトと呼び、スピーチレベルの使用、および、スピーチレベル・シフト生起の条件や機能をローカル・グローバル双方の観点から分析している。

まず、対話相手の年齢・社会的地位に応じたスピーチレベル、スピーチレベル・シフトの使い分けを見たグローバルな観点からの分析の結果、以下のことが明らかになった。社会人初対面の会話における「基本状態」(宇佐美, 2001a, 2002, 2003b)である敬体の使用率は、相手の年齢・社会的地位によって有意な差を示さなかったのに対して、常体の使用率は目下に対して有意に高いことがわかった。また、常体へのダウンシフトは、目下に対して多く、相手の年齢や社会的地位とほぼ反比例していることが分かった。つまり、グローバルな分析の結果は、社会人の初対面会話において人は、「目下に対して敬語をより多く用いるのではなく、目下に対して常体をより多く用いる」ということを示したのである。つまり、「現代の日本語使用においては、相手への待遇をより明確に示すのは、敬体の使用ではなく、常体の使用である」ということが明らかになったのである(宇佐美, 2001c)。しかし、一方、敬体へのアップシフトの結果は、ダウンシフトの結果と逆になるのではない

⁴ここでは、スピーチレベルとして、文末が敬体であるか常体であるかによって判断されたものを取り上げる。

かと予想されたが、敬体へのアップシフトの生起は、対目上、対目下、対同等の順に多くなり、相手の年齢や社会的地位と比例したものにはならなかった。

このような結果を解釈するためには、ローカルな分析が必須となる。スピーチレベル・シフトが生じた前後のコンテキストをローカルな観点から一つ一つ分析した結果、次のことが明らかになった。一度、相手が常体へとダウンシフトした発話をアップシフトさせ、敬体の会話に戻すことが多いのは、目下の話者である。しかし、目上の話者が、同等の相手に対してよりも目下の話者に対してアップシフトが多かったという結果は、目上の話者が目下の話者に対してダウンシフトすることが多いということと連動していることが明らかになった。つまり、目上の話者は、目下の相手には、親しみを表すなどローカルなコンテキストに応じて自らの発話をダウンシフトさせることが多かったが、そのまま常体で話し続けることはむしろ少なく、多くの場合、一旦常体へとダウンシフトさせた発話を、後に自らアップシフトして、基本状態である敬体に戻していたのである(宇佐美, 2001a; 2001b)。その結果、目上話者のアップシフトの割合は、自らダウンシフトすることが多かった目下の相手との会話において、同等の相手との会話におけるよりも、高くなっていたということが明らかになったのである。

このように、グローバルな観点からの分析のみでは解釈しにくかったり、見逃されてしまいがちな特徴が、ローカルな観点からの分析もあわせて行うことによって、明らかになるのである。

3. 談話研究の成果が「言語情報学」の創生にいかにか寄与し得るか

ローカルな観点からの分析は、従来の言語学の得意とするところであった。これまで言語学は、そのような言語学的な研究から得られた知見を情報工学に提供してきたと言える。また、情報工学は、その技術を駆使することによって、言語学研究的の合理化に貢献してきた。例えば、現在、自然言語処理研究が発展し、形態素解析を行う「茶室」(奈良先端科学技術大学院大学松本研究室)に代表されるような様々なツールが開発されてきている。これは、言語学の知見と情報工学の技術が相互に生かされている良い例と言えよう。

しかし、これまでの多くの研究には、本稿で論じてきたような、ローカルな観点とグローバルな観点を総合的に捉えて言語行動を分析し、言語行動を対人コミュニケーションそのものとして解釈するという視点が欠けていたのではないだろうか。

本稿で論じてきたようなローカル・グローバル双方の観点からの談話の語用論的研究は、言語学・応用言語学・情報工学の3つの分野それぞれに以下の点で寄与できる。

言語学に対しては、ローカルな分析のみではなく、グローバルな要因を考慮に入れることによってはじめて明らかになる現象があるということ、グローバルな分析の観点を提供できよう。「言語学」において、ローカル分析、グローバル分析の双方が統合され、グローバルな要因も考慮しなければ説明できない現象が扱われるようになることは、言語学に新たな知見をもたらすことにつながっていくと考えられる。

また、情報工学の領域には、実際の人間同士のコミュニケーションのメカニズムを解析するツールを開発するための視点が提供できる。そのことによって、形態素などの言語の形式的観点からのタグ付けのみではなく、「談話の流れを踏まえた上で解釈し得る発話の意図」というようなグローバル分析の観点も考慮に入れた、新しいタグ付けの発想とその開発を促進することができるだろう。

応用言語学の領域、とりわけ言語教育学においては、すでに、「状況に埋め込まれた学習」という、より自然で大きな文脈におけるやりとり・相互作用から学習を捉えようとする研究が盛んになってきている。そのような研究に対しては、目標言語における人間同士のコミュニケーションを円滑にするためのストラテジー、および相互作用のパターン、ディスコース・ポライトネス理論(DP理論)で言う「基本状態」(宇佐美, 2002;2003b)についての情報などを提供することができる。

このように、本稿で論じてきたような、ローカル・グローバル双方の視点を生かした「談話の語用論的研究」(応用言語学)は、言語学に必要な新しい視点、情報工学の技術が生かされるべき視点とテーマを、それぞれの分野に提供するという形で、「言語学」・「応用言語学」・「情報工学」という3つの分野の協働による学問としての「言語情報学」にも貢献することができるのである。

4. おわりに

本稿では、実際の談話データの分析例を用いて、談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の必要性と意義を論じた。最後に、改めて「言語情報学とは何か」をまとめる。

従来は、言語学や情報工学という「基礎」が、その名のとおり、応用言語学に「応用」され、貢献するという方向性しか認識されてこなかった感がある。しかし、実際は、両者の関係は、そのような一方向的なものではなく、実は双方向的なものである(宇佐美, 1999a)。談話研究から得られた知見は、これまでの認識とは逆に、言語学、情報工学の「基礎」としても機能する。そのことによって、従来の意味での「基礎」と「応用」の相互作用という領域間の新しい循環を生み出していく。その領域間の相互作用という循環が、ひいては、それらを有機的に統合する「言語情報学」という新たな学問分野の創生に寄与すると考えられるのである。そういう意味で、「言語情報学」とは、「言語学」・「応用言語学」・「情報工学」という3つの分野の協働により、「言語運用、人間同士の相互作用のダイナミクスのメカニズムを体系化する学問であると捉えることができるであろう。本学におけるCOEの拠点としての活動が、「言語情報学」を構築し、その成果を各言語の教育に適用していくことによって、国内外の言語教育の発展に少しでも貢献することができることを願ってやまない。

引用文献

- 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』662, 昭和女子大学近代文化研究所, 27-42.
- (1999a) 「視点としての日本語教育学」『月刊言語』28(4), 大修館書店: 72-80. 9頁.
- (1999b) 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』18(10), 40-56.
- (2001a) 「ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』国立国語研究所編, 凡人社, 9-58.
- (2001b) 「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究論集』6, 東京外国語大学語学研究所, 1-29.
- (2001c) 「二一世紀の社会と日本語」『月刊言語』第30巻第1号, 大修館書店, 20-28.
- (2002) 連載「ポライトネス理論の展開 1-12」『月刊言語』31(1-13).
- (2003a) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』, 平成13-14年度 科学研究費補助金 基盤研究C(2) 『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』(課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ), 研究成果報告書, 4-21.
- (2003b) 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」『国語学』54(3), 国語学会, 117-132.
- (2006, 本報告集) 「改訂版: 基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2005年2月25日版」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』, 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, 21-46.
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a Universal Theory of Politeness*, Hituzi Syobō.
- 宇佐美まゆみ監修 (2005) 「BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話1(日本人母語話者同士の会話)」東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」.
- 鄭榮美 (2006, 本報告集) 「友人間で行われる『誘い』の日韓対照研究—『誘い』におけるストラテジーを中心に—」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』, 東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」, 179-200.

<文字化資料で用いられている記号凡例> (宇佐美 2006 より抜粋)

- 。 [全角] 1 発話文の終わりにつける。
- ， 発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。
- ① [全角] 1 発話文および1 ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。
- ② 発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。
- ① 複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で ' ' に入れて示す。
- ② 通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、' ' の中に正式な表記をする。
- ? 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?。」をつける。
- ?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
- [↑][→][↓] イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いる。
- /少し間/ 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
- /沈黙 秒数/ 1 秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は 1 発話文として扱い 1 ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
- = = 改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2 つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
- ... 文中、文末に関係なく、音声的に言いよんどんのように聞こえるものにつける。

- < >(<) 同時発話されたものは、重なった部分双方を < > でくくり、重ねられた発話には、 < > の後に、(<) をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、 < > の後に、(<) をつける。
- [[]] [全角] 第 1 話者の発話文が完結する前に、途中で挿入される形で、第 2 話者の発話が始まり、結果的に第 1 話者の発話を終了した場合は、「[[]]」をつける。結果的に終了した第 1 話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に [[]] をつけ、第 2 話者の発話文の冒頭には]] をつける。
- [] 文脈の情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどをそのラインの一番最後に記しておく。
- () 短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、() にくくって入れる。
- < > 笑いながら発話したものや笑い等は、 < > の中に、 < 笑いながら >、 < 2 人で笑い > などのように説明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は 1 発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。
- < > 相手の発話の途中で、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、 < 笑い > とする。
- ” ” 発話中に、話者以外の人の発話が直接引用された場合、その引用された部分を ” ” でくくる。
- 『 』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、漢字の読み方を説明する部分、本の題名等や、話者自身の発話を引用した場合などは、その部分を 『 』 でくくる。
- # 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、# マークをつける。
- [] トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。